

英語のロジック把握を目指す高校授業の試み

竹内和義（海城中学・高等学校）

I. はじめに

新学習指導要領における英語教育ではコミュニケーションを重視する事が打ち出されているが、その大きな特徴の一つとしてオーラル・コミュニケーションの導入が挙げられるだろう。これに伴い総合英語である「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」や「リーディング」「ライティング」の指導方法も大幅に変わっている。細かく文を分析するような文法中心の学習ではなく、全体を捕らえ、メッセージを掴むことに重点が置かれてきているのである。また、それと同時に高等学校「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」の教科書では論説文やエッセイを扱う単元が確実に増えている。このような文章を理解するのに従来の訳読式の授業では対応できないのは明白ではないだろうか。なぜならば論説文やエッセイを把握するにはまさしく全体像を捕らえることが問われてくるからである。

従来は、個々の単語やその発音を練習し、音読や黙読に移り、それから内容を確かめるための細かい分析や日本語訳をするという授業展開が主流であった。これはいわゆるボトムアップ処理であり、枝葉末節にとらわれてコンテキストを無視したり、その結果全体のメッセージを把握できないという大きな欠点があった。これに対して、新たに脚光を浴びているのが、全体像を捕らえることから始めるトップダウン処理である。これは導入・本論・結論の形を押さえ、各パラグラフが演繹型なのか帰納型なのかを見分け、主題文を見つけることを目的としている。つまり「森を見てから木を見る」ことを習得してはじめて英語が「読める・聴ける」ようになるという考え方である。本稿では、新学習指導要領下で注目を浴びるスキーマ理論と機能文法の理論を紹介しつつ、その理論を実際の授業に応用した一つのモデルを提示してみようと思う。これは英語のロジックを生徒に意識させ、英文読解のエッセンスを教授し、聴解・作文・スピーキングにも応用できるような指導の実現を目指して行くものである。

II. 新・旧学習指導要領の比較

新・旧学習指導要領下のリーディングの指導方法を比較することから始めてみよう。

A. 旧指導要領

1. 文法による文の分析・説明と個々の語彙・語句による意味の把握が中心
2. 授業では1時間あたり1ページほどの範囲で、新出語の意味と発音、文法事項の説明、音読、日本語訳、練習問題というように機械的で細切れな活動
3. 枝葉末節にとらわれて、コンテキストや全体のメッセージを把握出来ない

B. 新指導要領

1. 「コミュニケーションを図る態度」を大きく打ち出した
2. 全体重視の指導、機械的な学習よりは認知的な学習の重視が見て取れる
3. 内容の把握を重視し、「文章や段落の構成、文脈の展開などを踏まえて読み取る」ことが明示された

さらに、新学習指導要領においては、生涯学習を視野に入れ、教科書を読むだけ、あるいは受験問題を解くだけに意義を見出すのではなく、将来、英字新聞や雑誌、論文、小説を読むなど種々の面で英語を活用できるよう求めている。それと同時に、自らすすんで英語を話したり書いたりする発信型の英語教育を目指している。つまり、テクストを分析して読むことも重視しながら英語的な論理や構成を持つ文章を書く能力を身につけることができるようになることを求める。また、日本的な曖昧な英文でなく、自己を明確に表現出来るいわば英語的な英文を書く能力を養うこともリーディングの大きな目標としている。

III. 英文テクスト読解の理論

A. スキーマ理論

上述の様な新しい指導方法に関して注目している理論のひとつにスキーマ理論がある。スキーマとは、あらゆる過去の知識(prior knowledge)を構造化し、原形化(prototype)して表したものであり、記憶の中に貯えられた一般的な概念を表すためのデータ機構である(Rumelhart, 1980)。スキーマは、大別すると次の2種類がある。

- ①内容スキーマ --- 文化的、社会的な人間の実世界に関するパターン化された知識
- ②形式スキーマ --- 言語的な知識(文字、綴り、文法、パラグラフの構成、談話)

この2種類のスキーマを効果的に利用することが、外国語学習には有効である。

B. ボトムアップ処理とトップダウン処理

Rumelhart(1980)は、スキーマは、頂点に立つ抽象的・包括的なスキーマから下位の具体的なスキーマに至るまでに段階的になっていると述べている。それによれば、スキーマの2種類のパターンが考えられる。

【ボトムアップ処理】--- 具体的スキーマから抽象的スキーマを引き出す

(例)パンプキンパイ → 食卓 → パーティー → 感謝祭

【トップダウン処理】--- 抽象的スキーマから具体的スキーマへ

(例)感謝祭 → パーティー → 食卓 → パンプキンパイ

英語学習においては従来、細部から全体へ向かうボトムアップ処理が一般的であった。しかし、新学習指導要領にもあるようにトップダウン処理も同時に採り入れなければテクスト全体を把握出来ない。上原(1994)の報告には、生徒の意識や学習状況はボトムアップ処理に偏っているとある。その報告で彼女は相互情報処理を行うには、文法学習と読解学習を明確に分け、前者で言語能力を最大限に高め、後者で全体から部分へという方向でテクストに取り組ませる指導を行わなければならないと指摘している(p. 16)。

この考え方には、リーディングだけに限ったものではないだろう。池野(1994)は、リスニングにおいてもボトムアップ処理のみでは対応仕切れないことを次のように述べている。「このところ、リスニングのストラテジーとして、トップダウン処理が注目されるようになった。日本では、従来、読みの指導においては、文法訳読式が主流で、学習者は一言一句を正確に把握することに専念するのが常であった。このボトムアップ処理の弊害は、読み手が部分的な情報はとれたにしても全体の情報がわからないか、あるいはわかるのがいかにもおそいという点である」(p. 96)。つまり、トップダウン処理とボトムアップ処理の両方向から対応することが有効な英文読解や英文聴解につながると考えられるのである。

C. 機能文法のロジカルアナリシス

機能文法とは、言語がどのように使われるかを主題として、文だけでなくテクスト全体

を分析する。これは、プラーグ学派の言語学者が中心になり研究したものである(谷口, 1992, p. 49)。彼らの研究は、以下の3つの柱からなっていた。

1. 既知のもの(シーム=theme)とそれに続くもの(リーム=rheme)の区別
2. 文の中の新・旧情報(new/given information)の区別
3. 情報の重要な部分とそうでない部分の区別

ここで、それぞれを検証してみたい。

1. シームとリーム

シームとリームの定義をするために、次の「3種類の主語」を考えてみる。

文法的主語 = 一般的に言うところの主語で、そのことについて叙述されるもの

論理的主語 = 動作主、行動を行うもの

心理的主語 = 主題(theme), 伝達の関心事になるもの

それぞれを例文を用いて明確にしてみよう。

The duke gave my aunt this teapot. (The duke が文法的、論理的、かつ心理的主語)

My aunt was given this teapot by the duke. (My aunt は文法的かつ心理的主語、
the duke が論理的主語[動作手])

This teapot my aunt was given by the duke. (This teapot が心理的主語、my aunt
が文法的主語、the duke が論理的主語)

シームとは、ここで言う心理的主語のことで、書き手が伝えたいメッセージの出発点、読み手に注目されるものということになり、文の一番最初にくるもののことである。リームは、シームの展開される所で、読み手の関心を引いた事柄について述べられる部分のことである。

シームになりうるもの(⇒文の一番最初に来るもの)には、(1)学校文法で主語の役目を果たすもの、(2)副詞節(If節、when節、etc.)、(3)目的の不定詞、(4)前置詞句、(5)補語で始まる文などがある。

シームはまた、二重構造を作ることもある。例を挙げてみよう。

If you look into the clearest river, you can see the earth changing.

上記の文において、If節は、文全体のシーム(大シーム)であり、youは、主節のシーム(小シーム)ということになる。

ここで、シームとリームの機能をまとめてみると次のようになる。

[シーム](1)文の始動要素として、発話(utterance)を文脈や状況と結び付ける

(2)可能ないくつかの結び付きの中から始発点となる一つの結び付きを作る

(3)テクスト(パラグラフ)構成の骨組みとなる

[リーム](1)発話の核心部として新しい情報の伝達部となる

(2)コミュニケーションを前に進める

2. パラグラフ内の主題進行 (thematic progression)

パラグラフ内では、リームは実質的な情報を担い、またシームは各文の方向づけをし、パラグラフの骨子を作る。従って、パラグラフ内の各文のシームを追うことにより、パラグラフの統括性や書き手がメインアイデアを説得する文のロジックの流れを知ることが出来る。このシームの展開の仕方には3種類の代表的な形がある。

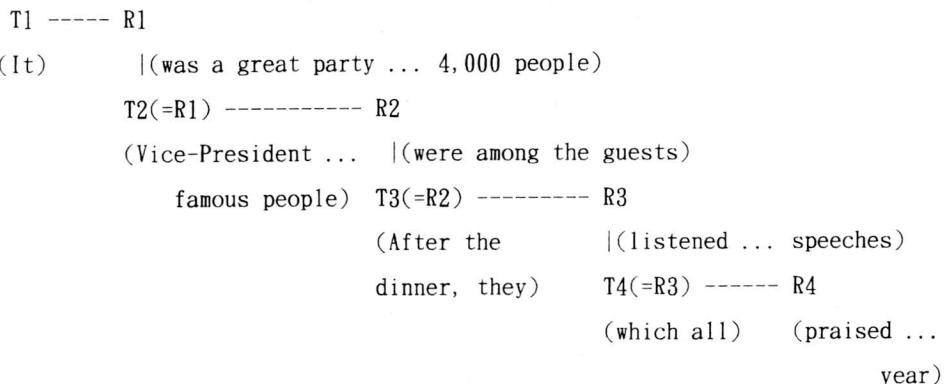
a. 連続型主題進行(sequential progression)

最初の文におけるリームが、次に来る文のシームになり、更に、その2番目の文におけるリームが3番目に来る文のシームになる形を連続型主題進行と言う。このパターンは、何度か繰り返されることになるが、あまり長くなるとパラグラフのメインアイディアから外れ焦点ボケとなる恐れがあるので、連続は数個で止まるのが普通である。

例文とダイアグラムで表すと次のようになる。

(例1)

(1) It was a great party with nearly 4,000 people. (2) Vice-President Ford, movie stars, and many other famous people were among the guests. (3) After the dinner, they listened to a number of speeches (4) which all praised John as the best player of the year. (Sunshine English Course 3, p. 73)



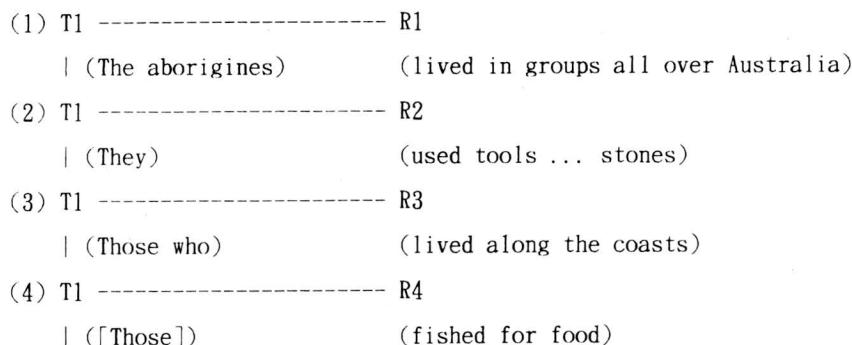
b. 平行型主題進行(parallel progression)

2つ目は、一つのシームを中心として、様々なリームが展開されて行く形である。

(例2)

(1) The aborigines lived in groups all over Australia. (2) They used tools of wood and stones. (3) Those who lived along the coasts (4) fished for food. (5) Those who lived in deserts (6) caught animals and (7) gathered wild foods. (8) Men caught large animals like the kangaroo and the emu. (9) Women and children gathered seeds, fruits, and roots and (10) trapped small animals.

(The Crown English Series 1, p. 27)



- (5) T1 ----- R5
| (Those who) (lived in deserts)

(6) T1 ----- R6
| ([Those]) (caught animals)

(7) T1 ----- R7
| ([Those]) (gathered wild foods)

(8) T1 ----- R8
| (Men) (caught large animals ... the emu)

(9) T1 ----- R9
| (Women and children) (gathered ... roots)

(10)T1 ----- R10
([Women and children]) (trapped small animals)

これは、同じシームのもとに様々な角度からたたみ込むように説得する論理構成である。

c. 進展平行型主題進行(extended parallel progression)

上記の2つは基本形であるが、実際の英文は、連続型主題進行と平行型主題進行との組み合わせが多い。

(例3)

- (1)The Industrial Revolution brought about many changes in women's lives.
 - (2)Before the 1700s and 1800s, most women worked only in the home or on the farm. (3)Few were educated, and (4)none could vote. (5)As the Industrial Revolution spread, women began working in factories.

(Crown English Series 1, p. 25)

- (1) T1 ----- R1
|(The Industrial Revolution) |(brought ... women's lives)

(2) | T2(=R1) ----- R2
| (Before ... most women) (worked ... farm)

(3) T1 ----- R3
|(Few) (were educated)

(4) T1 ----- R4
|(none) (could vote)

(5) T1 ----- R5
(As ... women) (began working in factories)

3 情報の流れと重要性

次に情報関係という観点から文と文のつながりを見てみたいと思う。文は旧情報と新情報とから成り立っているものである。旧情報とは、その文の以前に述べられた事柄、誰しもが知っていること、話の出だしになること、あるいは状況から分かることなどである。これに対し新情報とは、書き手が読み手に伝えたい情報の核心のことである。例

文を見てみよう。

(例4)

(1)As more women began working outside the home, they began organizing to raise their position in society. (2)The first steps were made in education.
(3)In the 1800s public schools, high schools, and finally colleges opened their doors to women.

このパラグラフを、新・旧情報に分けて考えると次のようになる。

(1)(旧情報) As more women began working outside the home

(話の出だしかつ前パラグラフを受ける)

(新情報) they began organizing to raise their position in society

(2)(旧情報) The first steps

(organizing to raise their position in society を受けて)

(新情報) were made in education

(3)(旧情報) In the 1800s public schools, high schools, and finally colleges

(were made in education を受けて)

(新情報) opened their doors to women

トピックセンテンスも文である以上旧情報と新情報から成り立っているが、例文4からも分かるように、パラグラフの先頭にきた場合パラグラフ全体の新情報を表すことになる。

また、新情報・旧情報の位置に関しては、「旧情報+新情報」という順になる場合がほとんどである。それは、「旧情報が先にくると、読み手はその旧情報をもとにスキマを呼び出し、新情報を受け入れる準備態勢をとれる。」(谷口, 1992, p.77)という理由からである。例文5を見てみよう。

(例5)

... (1)Some educated women hold high political offices. (2)Among these, Indira Gandhi and Corazon Aquino are the most famous. ...

(Crown English Series 1, p.26)

ここでは、(1)の内容を受けて、本来(2)の最後に来るべきAmong theseが旧情報として明確になるように文頭に置かれている。

その他、旧情報の形態には、節、名詞、副詞、形容詞などが考えられる。それらについて例文6から9を挙げておきたい。

(例6) - 旧情報が従属節である。前パラグラフの情報をまとめ、新情報を導く。

As more women began working outside of the home, they began organizing to raise their position in society. (Crown English Series 1, p.25)

(例7) - 旧情報が名詞で主語。この主語に、前パラグラフがまとめられ、述部が新情報となる。

The caste system divided people into four groups. (同 p.23)

(例8) – So一語で旧情報を担う。

So he began to feel sad and took to drinking tea alone. (同 p. 39)

(例9) 本来補語であるが、主語の前に来て、前パラグラフの内容をまとめる旧情報。

Closely related with the frontier ideal is the ideal of self-reliance.

また、それぞれの情報には、重要度の違いがあるが、例4を再び見ていただければ分かるように重要度の高い情報ほど後の方に来る傾向がある。

D. パラグラフ

パラグラフとは何か、その定義は Walsh(1972)によれば、ひとつのトピックを展開するひとまとめの文の集合ということになる。英文を読む際は、「読み手はそのパラグラフを読み終わるまで常にそのトピックを念頭において読み続けなければならない。」(谷口、1992、p. 92)のである。

次にパラグラフの構成について考えてみたい。高校教科書のひとつである Mainstream Reading Course によると「論説的な文章では、普通、パラグラフはトピック・センテンスと、それを支え、説明し、補強する文(supporting sentences)から成り立っている。」とあり、更に「パラグラフの構成は、パラグラフの最初にトピック・センテンスを置き、それを発展させる演繹型と、始めに具体例などを述べて、最後にトピック・センテンスを置く帰納型が多く用いられる。」と説明されている。これは、英語の論理展開の基本であり、何よりも先に生徒達に教えなければならないことであろう。

同教科書は、パラグラフのトピック展開の手法は、(1)具体例・繰り返し(examples; repetition)、(2)分析・分類(analysis; classification)、(3)比較・対照(comparison; contrast)、(4)原因・結果(cause; effect)などがあることも挙げ、論理的展開の重要性を強調している。こうした展開の手法はパラグラフ内を区分(segment)することで明瞭になる。論者の主張部分とその他の部分がどのように組み合わされているか(argumentation)を視覚的な立論標識(discourse marker)によって見極められるからである。Halliday&Hasan(1976)は、この立論標識を付加・反意・原因・時の4種類に大別し、更に詳しく説明している(pp. 242-3)。以上のようなパラグラフの構成・展開を理解したうえで、「パラグラフ全体を一つの単位として書き手の主張を読み取る姿勢と技術が必要」(谷口、p. 94, 1992)となるのである。

このパラグラフの展開をより分かりやすくしているのが、主要な要素であるトピックセンテンスである。加藤とハーディ(1992)は、「トピック・センテンスの役割りは、パラグラフの焦点と範囲を示すことである」(p. 114)と述べている。つまりトピックセンテンスは情報関係のところでふれたように、パラグラフ全体の新情報を提供すると同時に、パラグラフの方向性を指示する働きをするのである。なお、トピック・センテンスの位置は、上述のように、パラグラフの始めに来る(演繹型)場合と、最後に来る(帰納型)場合が圧倒的に多いが、まれに途中に来る形もある。

E. テクストの統括性と結束性

パラグラフはいくつか集まってテクストとなる。そのテクストが全体として、論理的

であるためには統括性（マクロプロセス）がなければならない。読み手の側も全体のメインアイデアと各文の関連を常に意識しつつ読み進めなければならない。そのためには、①各文がテクストの主題から外れない、②各文の論理に整合性がある、③結束性がとれている、④照応が適切に行われている、⑤主題進行がうまく行われている、⑥新・旧情報の関係が正しく行われている、といったことを確認しながら読むことを心掛ける必要があるだろう。

この統括性に対して挙げられる結束性（マイクロプロセス）とは、パラグラフよりも小さな単位であり、文と文（節と節）の間の関連を扱うものである。具体的には、照応(reference)、代用(substitution)、省略(ellipsis)、接続詞(conjunction)、語彙連結(lexical cohesion)、新・旧情報関係、(Halliday and Hassan, 1976)などが考えられるだろう。これらのつながりを意識することで文の論理が掴みやすくなるのである。これは、英文を書くときにも大いに役に立つはずである。

F. リーディング・テクニック

実際に生徒達に英文の読解を教える際、習得させなければならない技術的な事柄がいくつかある。その一つ目は、フレーズ・リーディングである。単語ひとつひとつに目を留めるのではなく、フレーズをかたまりとして捕らえることである。その利点は、①1回の固視で多くの情報を得る、②ストーリーを覚えやすい、③ストーリーを思い出しやすい、④語やアイデアを推測しやすい(Gillet & Temple, 1982)などである。二つ目は、アイ・スパンを広げ、一度に捕らえるフレーズの数を多くすることである。これが速読につながるのである。そして、もう一つは、読後に要約をしてみることである。

英語で書かれた文章を要約するのは、日本語で書かれた文章を要約するのとは大分違う。日本語の要約は、段落の中に何回も出てくる言葉に着目し、それを中心に重要な箇所を拾い内容をまとめていくことになる。そのためパラグラフのどの位置に大事な事が書かれているかは即座には掴みにくい。これに対し、英語の要約は、メインアイデアはトピックセンテンスの形で文中に示され、更にそのトピックセンテンスはパラグラフの初頭にくることが多い。それゆえ、各パラグラフのトピックセンテンスを掴むとほぼ要約の骨子ができたことになる（谷口, 1992, p. 222-3）。その方法は、①繰り返しを省く、②大事でないものを省く、③総括的な表現を用いる④トピックセンテンスを用いる、⑤トピックセンテンスを作る(Brown, et al)という形にまとめられるだろう。

IV. 授業実践

A. 論説文・説明文の特徴を説明（年度初めの第一回授業）

エッセイの構成であるIntroduction - Discussion - Conclusionの形を認識させ、上述した要領でパラグラフの構成・展開そしてTopic Sentenceについて説明をする。

B. 背景知識（内容スキーマ）活用

新しい課についての情報・知識となり得る予習プリント（主として教師用マニュアルにある日本語によるその課の解説）を最初の授業に入る前に配布しておく。

C. 新出単語リスニングと口頭発音練習及び意味の把握

ここからが授業の実際となる。新出単語や熟語（形式スキーマ）を十分習熟（ボトムアップ処理）する。

D. 本文のリスニング

まず、聴くことを中心に行い文字（教科書）は見せない。始めは概略をつかむことを目的に、通して最後まで聴く。

E. 本文の内容に関する質問

Topic Sentenceの中心を問うような質問を用意し、全体の概略を掴ませることを目的とする。次に、より詳しい部分に関する質問を用意し、細部を理解させる。それぞれ3～4回位テープを聴かせる。

F. パラグラフ・リスニング

パラグラフ単位でテープを止め、通訳、ノートテイキングをする。これは、単なる和文英訳ではなく、聴きながら理解し、正確さよりも大筋をつかむことに重点を置く。

G. Logical Analysis [パラグラフ・リーディング]

ここで初めて教科書を見て、それまでの聴き取った内容を確認する。その際、パラグラフの構成を考え、演繹型、帰納型の判断をし、トピック・センテンスを見つける。

H. 日本語で要約

以上のような手法で本文の最後まで終え、まとめとして日本語で要約を行って、論理的な要約の練習をする。

I. その他

ReproductionやShadowingなどで自然の速度の英語を習得できるように練習する。

V. おわりに

英語を理解するには、読むにも聴くにも英語的ロジックを把握することが不可欠である。単語や熟語を知っているだけでは英語を理解できる保証はない。無論、単語や熟語を少しでも多く知っているに越したことはないが、そのような従来のボトムアップ的な方法論では恒久的な英語力の養成にはあまり役立たないことは証明済みである。

平素より多岐にわたる問題意識を持ち、スキーマを拡大しておくことや、実際の英語を読んだり聴いたりする際、パラグラフを意識して行なうことがより大切になってくる。高校レベルの授業においては、この点が従来欠落していたように思われる。新学習指導要領は、この点を配慮してトップダウン的なアプローチを奨励している。そこで求められることはパラグラフのトピックが何であるのかを押さえ、シーム・リーム関係や情報関係を目や耳で追いかけることであり、決して言葉を追うことではないのである。

英語学習とは英語自体を勉強するのではなく、英語を媒介として新しい情報を採り入れるという姿勢で勉強していくことが英語力を伸ばすことにつながる。従って必要以上に細部にこだわる文法問題や訳読問題は百害あって一利なしということになる。教師は今までの発想を転換させ、生徒に対して、どのような新たなアプローチが可能かを探求して行かねばならないだろう。

参考文献

- Alderson, J.C., and A.H. Urquhart., eds. (1984) Reading in a foreign language. New York: Longman.
- Brown, A.L., Day, J.D., & Jones, R. (1983). The development of plans for summarizing texts. *Child Development* 54: 968-979.
- Carrell, P.L., J. Devine., and D.E. Eskey., eds. (1988) Interactive approaches to second language reading. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gilbert, J. (1991) Clear speech. Cambridge: the Press Syndicate of the University of Cambridge 1-2.
- Gillet, J.W., & Temple, C. (1982). Understanding reading problem: assessment and instruction. Boston: Little Brown and Company.
- Grellet, F. (1981) Developing reading skills: a practical guide to reading comprehension. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, M.A.K. (1994). An introduction to functional grammar. 2nd ed. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Hassan, R. (1976). Cohesion in English. London: Longman.
- Haynes, J. (1989). Introducing stylistics. London: Unwin Hyman.
- Hinds, J. (1983) "Retention of information using a Japanese style of presentation" *Text*, 3.
- 池野良男, et al. 「“Top-down Process”を用いた聴解力の養成」STEP BULLETIN vol. 6 論日本英語検定協会 95-105.
- 加藤恭子&ヴァネッサ・ハーディ(1992).「英語小論文の書き方」東京:講談社現代新書
- Peterson, P. (1991) 'Synthesis of methods for interactive listening' In Mariane Cele-Murcia Teaching as a second foreign language, New York: Newbury House, 106-122.
- Richards, J. (1990) The language teaching matrix. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rumelhart, D.E. (1980). Schemata: the building blocks of cognition. In R. Spiro, B. Bruce and W. Brewer (eds.), Theoretical issues in reading Comprehension. Hillsdale, New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- 谷口賢一郎 (1992).「英語のニューリーディング」東京:大修館書店.
- 谷口賢一郎 (1995)「新時代のリーディング指導」『高校英語展望』小学館、尚学図書, 22-24.
- 上原景子 (1994)「スキーマ理論を用いた中学生の読解力の育成と評価」STEP BULLETIN vol. 6 論日本英語検定協会 13-29.
- Walsh, J.M. & A.K. Walsh. (1972). Plain English handbook. Cincinnati, Ohio: McCormick-Mathers.